

あかし本 時のまちを創る海のまちに生きる

編・神戸新聞明石総局



A5／168頁／本体価格 1,800円+税

ISBN:978-4-295-40101-8

【お問い合わせ】ペンコム PENCO III

Tel:078-914-0391 fax:078-959-8033

<http://pencom.co.jp>

すべては「人の熱さ」に触れたことから始まった。

2014年、「時」と「子午線」について熱弁を振るう

明石市立天文科学館の学芸員に惹かれた。

2016年、「海」や「魚」についてぶつかり合いながら

議論する漁師たちに惚れた。

「その思い、多くの人に伝えなあかん」と思います。

私に書かせてください！」

一人の記者の直訴。

こうして、神戸新聞明石総局の長期連載がスタートした。

# 時と海

わたしたちの知らない明石がここにある

神戸新聞明石総局の3年に及ぶ人気連載を書籍化  
動画とも連携した貴重な資料

# ひよご選書

あかし本  
時のまちを創る

神戸新聞明石総局編



ジャーナリズムは「根柢」だ。当たり前すぎて通り過ぎていただものが、根柢によって色鮮やかに浮かび上がる。本書もはじめに、一人の記者の根柢があつた。「子午線」と「海」。明石を語る、古くて新しいキーワードである。明石市立天文科学館の学芸員や漁師の話を聞くうちに、彼らの熱い思いを記事にしようと心に決めた。

「今さら聞けない」と罵りながら書いた神戸新聞明石総局の記者たちは心機一転、長期連載に向けて歩き始めた。子午線の上に建つ郵便局や小学校。天文科学館に隣接する人丸山の月照寺には昔、稻垣足穂が短編「星を売る店」を書いた茶室があつた。足穂は自分の体を賣く子午線を強く意識しこれを書いたとのちに回想している。

日本標準時は明石で決まると思いつぶやくいる人は多いが、これは誤解だった。1967年に、地球の回転に基づく「天文時」からセシウム原子の振動数を用いた「原子時」に変更されて以降、標準時は東京の情報通信研

あかし本

時のまちを創る 海のまちに生きる

神戸新聞 2017/8/13(日)掲載  
ノンフィクションライター  
最相葉月氏による書評

究機構にある原子時計が決めている。東経135度の子午線がグリニッジ天文台の世界標準時から9時間の時差を決めているのには変わりないが、「明石で太陽が真南にきたら正午」と思い込んでいる人は半世紀ぶりに情報を更新していただきたい。私もその一人です。

子午線が通るのは明石だけ、という思い込みも即修正すべし。京丹後市、西脇市、和歌山市の友ヶ島など12市もある。6月10日の時の記念日を国民の祝日にしよう活動している市民は、これら12市との連携を模索していよいよ頑張る。

本書の後半は、ノリやイカゴ、タケ、タコといった海の幸が主役。ノリは1963年の「サンバチ冷害」を機に、捕る漁業から賣てる漁業に変わった。水深が深く、潮流が速いところで

も養殖できる兵庫発の「浮き流し式」によって、漁場は瀬戸内海まで広がった。日本最高峰と呼ばれる「明石浦」の手嶋が写真入りで説明されているのもうれしい。空襲で母親を失ったタコ釣り漁師さんは、生活のために台風の日も父親と一緒に出た日々を回憶する。人に歴史ありである。

私は幼少から神戸に住み、明石の天文科学館に遠足に行き、海の幸を食べてきた。東京暮らしが人生の半分を超えて、あれがどれほどせらくな日々だったかとかみしめている。おどなりさんどのうれしい再会のような、懐かしさと愛しさと驚きに満ちた一日だった。

評者 最相葉月・ノンフィクションライター  
(ベンコム・1944年)